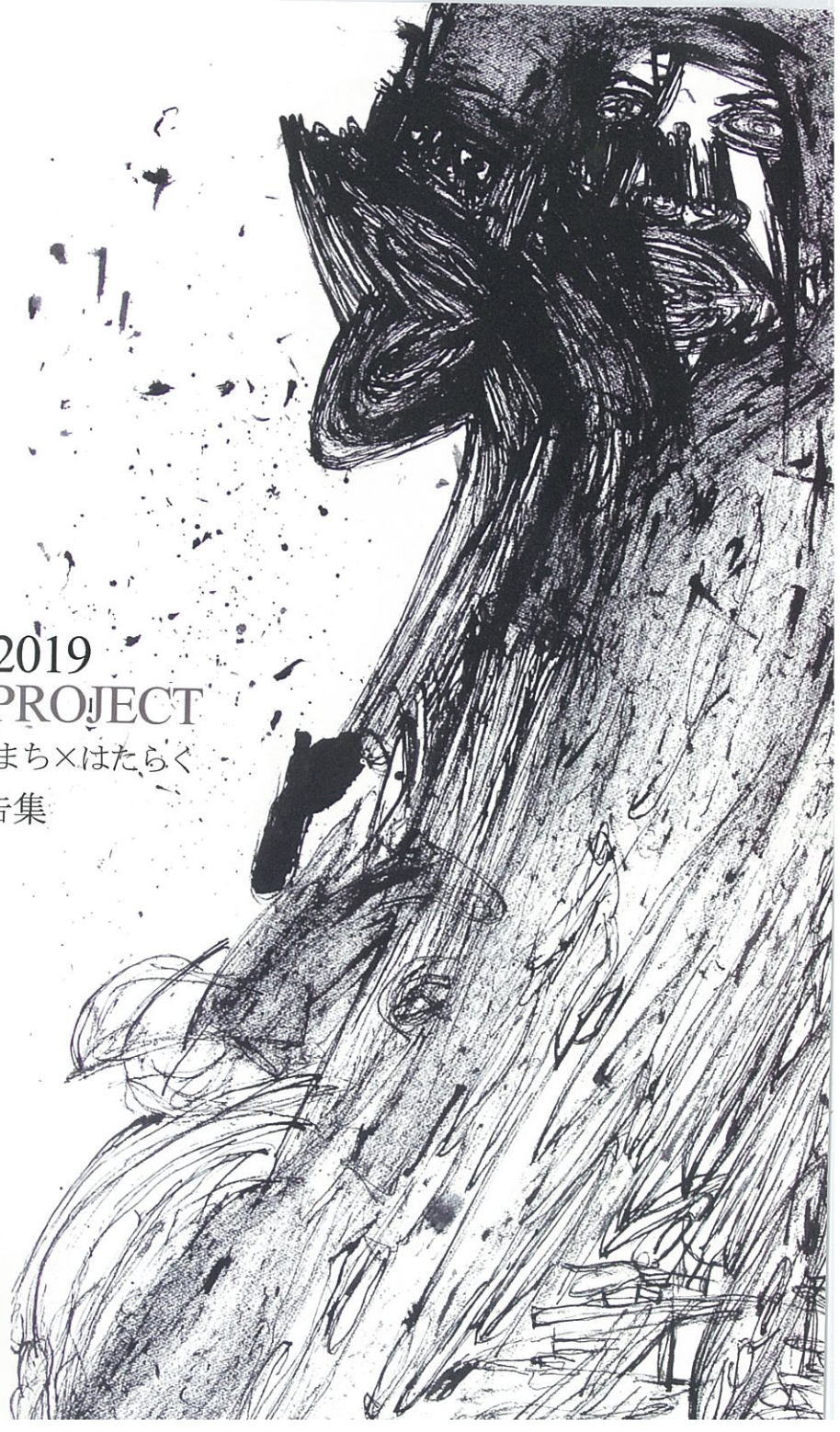
Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION



縁 2019 PROJECT

アート×まち×はたらく

活動報告集

縁プロジェクト2019とは

障害者の芸術作品や芸術活動に取り組むアーティストは、福祉分野や美術界の一部においてはある一定の評価を受けながらも、一般社会においてはまだまだ広く認知されているとは言えない。また、障害者の芸術作品を媒体として福祉と地域をつなぐキーマンとなる次世代の人材育成も大きな課題である。

そこで、福祉や障害者にあまり関心のない人たちを主なターゲットとし、次世代を担う大学生たちがディレクターとなり、障害のあるアーティストや作品の魅力を幅広く様々な手法で、国内外に発信するプロジェクトを立ち上げる。

障害のある人も、ない人も共に「アート×はたらく×まち」で、つなぐ縁EN。

2019年、京都でICOM（国際博物館会議／2019年9月1日～7日）が開催され、141カ国、約3,000人の世界の博物館、美術館関係者が京都に集結します。この時期に合わせ、「攻めるダイバーシティーなアート×働く×まち」と題し、障害のあるアーティストや作品を中心に多様なプログラムを創出し、海外の美術、博物館関係者をはじめ地域住民はもちろん、国内外から集う観光客を対象に幅広く社会に発信し、多種多様、幅広い世代間をつなぎ相互理解を深めます。

やまなみ工房

やまなみ工房は1986年、「やまなみ共同作業所」として滋賀県甲賀市甲南町に誕生しました。

やまなみ工房は6つのグループに分かれて活動しています。粘土や絵画に取り組む「アトリエころぼっくる」、刺繍に取り組む「こっとん」、健康のため散歩や運動に取り組みながら表現活動に取り組む「ぷれんだむ」、メンテナンス作業を中心に絵画に取り組む「もくもく」、古紙回収等、様々な活動に取り組む「たゆたゆ」、カフェを営業する「ｈｕｇｈｕｇ」。

どのグループにおいても、それぞれが一人一人の個性や気持ちに沿った活動に取り組み、大切な人達と一緒に、生きがいややりがいが感じられるとても楽しく居心地の良い場所です。

やまなみ工房は大切にしている事があります。あるがままの自分が認められ一人一人の思いや価値観が大切にされる事。

いろんな場所に行ったり、いろんな人に出会って「わーすごい！見て見て!!」…と目を輝やかせたり心ときめいたり、そうした事をいっぱいする事。

自由である事。その人がそれぞれ自分達で進むべき道を拓いていく。自分のライフスタイルやこうありたい、こうしたいを自分で決めていく事。

失敗が許され、失敗が活かされる場所である事。仕事とは、働くとは、それが本人が主体的になってこそ意味を持ち生きたものになるのですから。

仲間がいる事。自分の気持ちに素直に、ありのままの自分で接する事ができ、大切にされ必要とされる。例えばその日、みんなと違う事がしたいなら同じ事をしなくてもいい。でも私は一人ぼっちじゃないと安心できる。誰だって一人で居たい時間や、一人で過ごしたい場所もあれば“〇〇したくない”事だってあるのだから。

一人一人が健康で自分らしく心豊かに過ごせますように。

「様々な縁を結ぶアートプロジェクト」

2年前の2017年12月上旬、日本財団主催の就労支援フォーラムで、Ｅテレの「バリバラ」の収録を終えた後のことだった。財団の竹村利道氏から、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、障害者アートによる新しい文化プログラムが出来ないだろうかと相談を持ちかけられたのが、そもそものきっかけだった。

その後、紆余曲折を経て、2019年夏、やまなみ工房と京都および大阪の大学生が連携し、ＮＨＫプラネット近畿がプロデュースする形で「縁プロジェクト」が始まった。

縁プロジェクトは、その名の通り、アートを通して、さまざまな縁を結んでいくプロジェクトである。人と人をつなぐ、地域と人をつなぐ、国内外をつなぐ、世代をつなぐ、今と未来をつなぐ・・・「アート」をつなぎ役として、有機的なつながりを作っていくことを目的としている。

東京オリンピック・パラリンピックが決まってからというもの、障害者アートの展覧会が、それまでには考えられなかったほど、数多く開かれるようになったが、基本的には美術館やギャラリーを中心とした“箱”の中での展示であり、来場者の多くは、福祉関係者であるか、もしくは福祉や美術にそこそこ関心の深い者である。そこで、今回のプロジェクトはあえて箱から飛び出し、縁を求めて開かれた街中へと繰り出そうと考えた。

縁日といえば、屋台は欠かせない。その屋台を「モバイルミュージアム」に仕立て上げ、街を回遊するのだ。まずは大学生とアーティストが屋台を作るために縁を結ぶことから始まる。最初は互いに戸惑いながらのコミュニケーションも、アート作品を介して心が通い、大学生たちは、アーティストと作品のために最適なデコレーションを屋台に施し、オンリーワンの屋台ミュージアムを作りあげた。

完成した屋台ミュージアムをアーティストと共に引いて、世界的な観光都市、京都の街に繰り出せば、数多くの外国人観光客を引き寄せ、言葉の壁を越えて、縁を次々に結んでいく。フェスに参加すれば、地元の買い物客や、遊びに来ていた親子連れが、ごく自然に「アート」に触れ、作家と触れ合っていく。

縁プロジェクトは、まさに障害者アートの共生社会における潤滑油としての可能性を切り開く重要な契機となったと言えるだろう。

最後に、縁プロジェクトは、このように、障害者アートを通じた社会貢献に取り組む人材の育成を主たる柱としており、大学生を対象とした福祉教育モデル構築を目指している。

NHKプラネット近畿　日比野和雅

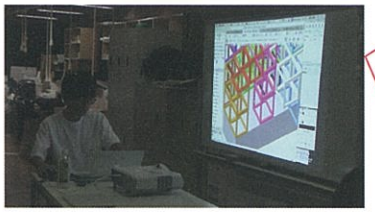
縁・大学生プロジェクト

縁プロジェクトインターンディレクターとして、京都造形芸術大学、京都精華大学、大阪人間科学大学の学生らが、みずみずしい感性と自由な発想を活かし、障害者アートのこれまでにない新しい見せ方、プロモーションを生み出し提案。
障害のあるアーティストと共に、モバイル屋台を小さなミュージアムに仕立て街中を回遊、京都の寺院やカフェにおいて展示したり、アートグッズ販売をする等、大学生×障害者×観光客×市民の様々なコラボレーションを試みたプログラム。

モバイル屋台ミュージアム制作

1 施設見学

各大学生らがやまなみ工房へ数回訪問。施設概要や作品の制作風景等見学し、施設や利用者について深く知る事からスタートしました。
京都造形芸術大学、大阪人間科学大学の学生は、やまなみ工房の利用者に1日密着し、作品制作や食事等、ともに過ごすことで創作方法だけでなく「その人が、何を思いながら、どういう事をしながら創作するのか」といったことを本人から聞いたり感じ取ったりしながら、モバイル屋台ミュージアムのイメージを膨らませました。
施設見学を行う中、学生それぞれが、印象に残り屋台で紹介をしたいと思う利用者をバディに決定し、思い思いのイメージで屋台制作が開始されます。



2 モバイル屋台制作

モバイル屋台の制作については、各大学ともそれぞれの特性や専門性を活かしたユニークなモバイル屋台が提案されました。
それぞれの大学がひとつのテーマを定め、コンセプトに基づきデザインがされていきます。
作品や販売物をいかによく見せられるか、また移動ミュージアムの役割を果たし、安全性や機能性も重視したものとなり、作品を見せること、作品を大切にすることを屋台作りから学び、作品の奥にあるその人自身を思う気持ち、大切にする心を実感できる貴重な機会となりました。

モバイル屋台完成

京都精華大学 建築学科

『移動ミュージアム「FELLOWS～仲間と共に～」
仲間と共に考える　仲間と共に作る　仲間と共に生きる』
〖京都デザイン賞2019 入選（プロダクト部門）〗

デザインの特徴は、
1.移動時には直方体としてコンパクトになること
2.展示場所と内容に合わせて、各パーツを多様に展開することができること
3.展示台、展示壁を簡単に組み立てることができ、かつ差し込み棒で丈夫に固定することができること

多様な背景をもつ人たちが幸せに暮らすことのできる社会であるダイバーシティを表現し、人々を感動で結ぶアート作品が映える事をテーマにしました。

3

制作者：葉山スタジオ３年生
太田垣心／川井奎南／佐々木美紅／柴田陽成
中西円香／橋拓歩／福岡拓巳／山根江梨花
トウコウシ
担当指導教員：葉山勉／松本和美

グッズ販売
大阪人間科学大学

販売担当：竹下央起（大阪人間科学大学２年生）
他、有志の大学生

『ご縁がある屋台』

５台の屋台で五角形を表現したり、５台が連なって動くことで「つながり」を想起する屋台を目指しました。
話し合いを重ねた結果、シンプルな構造にした上で作家のコンセプトに合う装飾をそれぞれに施しました。

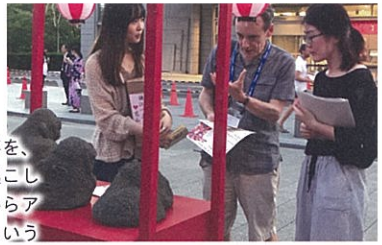
屋台テーマ
飛び込む屋台

制作者：小濱いずみ(こども芸術学科二回生)
バディ：大路裕也(やまなみ工房)
大路さんの作品を展示するにあたって重要視したのは、作品に集中できる「空間」です。
外の世界と切り離し、作品を鑑賞してもらう為に、屋台全体を薄いレースで囲みました。また、展示される作品は、海の生き物がモチーフになっています。鑑賞する際に、海に飛び込む感覚を体験してもらいたいと考え、この屋台をデザインしました。屋台をレースで覆うことで、中の作品に興味が湧くようにもなっています。

屋台テーマ
作品の迫力をそのままに

制作者：土井菜々子(こども芸術学科二回生)
バディ：宮下幸士(やまなみ工房)
大きな作品をシンプルに展示し、迫力を感じる事ができるよう屋台をデザインしました。
はじめて宮下さんの作品を見た時、その表現の細かさにとても驚きました。実際にやまなみ工房へ見学に伺った時に、職員の方が過去の作品を見せて下さり、宮下さんが単に新聞や地図を写し取っているだけでなく、それらのモチーフには載っていない不思議な記号や大好きな魚の絵などを画面に加えていることを知りました。例えば、フランスの地図がモチーフになった作品では、その裏側に職員さんがフランスへ出張に行くスケジュールが細かく書かれています。
屋台にはそれら細かな宮下さんらしい表現をゆっくり観てもらうために、虫メガネを設置しました。

屋台テーマ
恋みくじと屋台



制作者：木村凜香(こども芸術学科二回生)
バディ：鎌江一美(やまなみ工房)
恋みくじに書かれた内容は、彼女と関わりで教わった事を、そこから私なりに解釈し、彼女の口調を意識し文章に起こしたものです。恋みくじを引いた方が、一美さんご本人からアドバイスを頂いてるような気持ちになってもらえたらという思いを込めています。それほど、彼女の導きには力強いパワーがあります。また、“恋みくじ”や“縁”というキーワードから連想し、屋台デザインは神社をイメージしました。彼女のひと目見て圧倒される細かく繊細な作品が、神社のお地蔵さまの様に見えたのも要因の一つです。
訪れた人が恋の神に会え、あわよくば縁結びの効果もあるかもしれない屋台。信じる信じないかはあなた次第。

屋台テーマ
出会いのきっかけになるように

制作者：諸井まり(こども芸術学科二回生)
バディ：大家美咲(やまなみ工房)
野外で屋台を使用した作品展示を考慮し、遠くから見ても目を引くデザインにしたいと思い、作品イメージを全面にプリントし目立つデザインにしました。通行する人が、何しているんだろう？と少しでも興味を持ち、屋台を見て、そして作品を見てもらえることが大切だと考えました。
大家さんの作品の特徴は、可愛らしいカラフルな色使いと規則的に並んだ三角形であると思います。それをもとに、大小様々な三角形を作り、屋台に吊るし配置しました。展示する作品の統一感が出るように、大家さんが制作でよく使用しているピンクや黄色、水色で制作しました。
野外で風に少し揺れるのも素敵でした。
イベントでは屋台をきっかけとして、たくさんの人と出会うことができました。

屋台テーマ
『動き続ける』屋台

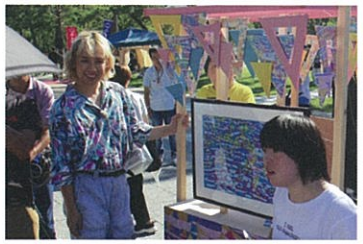
制作者：中田茉友子(こども芸術学科二回生)
バディ：井村ももか(やまなみ工房)
井村さんと一緒に１日を過ごし、私の心に残ったのは、やまなみの職員の方から仰った「井村さんは、直ぐ何処かに行ってしまうので」という言葉でした。井村さんは制作中立ち上がり、自分の机を離れ、建物から出て行きいろんな場所に出掛け、また自分の机に戻ってきます。私が出会った井村さんは動き続ける自由な女性でした。
その動きを表現する為に、自由な動き方をする物とは一体何だろうと考え、吊るし飾りを思い付き、屋台をデザインしました。
また、屋台には井村さんの複数の作品を展示し、様々な角度から見て楽しむことができるよう、高さが異なる２つの台を用意しました。

モバイル屋台/アートライブ、ワークショップ

京都 食とアートのマーケット in 東本願寺

開催日/８月２４日(土)
場　所/東本願寺前緑地帯
来場者数/50名

縁プロジェクトのプレイベントとして参加。
フリーマーケットのため、グッズ販売を中心としたモバイル屋台を設置。
チラシ配布等、縁プロジェクトの告知も行う。



ロームシアター京都／京都マムフェス

◎ロームシアター京都
開催日/８月３１日(日)
場　所/ロームシアター前広場
来場者数/30名

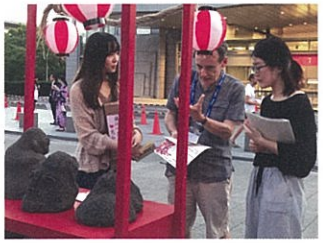
◎京都マムフェス
開催日/９月７日(日)
場　所/岡崎公園
来場者数/123名

ロームシアター京都では、プロジェクトのPRで京都造形芸術大学の屋台が出展、京都マムフェスにおいては、すべての屋台が出展される。
岡崎公園では、陶芸のワークショップやNHK Eテレ「バリバラ」の取材で、タレントのりゅうちぇる氏が参加する等、多くの方が屋台に訪れる。また屋台も移動しながら道行く方に作品をPRした。

ICOMソーシャル・イベント 岡崎エリア会場

開催日/９月５日(木)
場　所/京都国立近代美術館前
来場者数/103名

ICOMに参加する各国の博物館、美術関係者にPRする。
限られた時間であったが、モバイル屋台や作品に感心を示される外国の方等、多数おられ、このプロジェクトを知ってもらえるよい機会となる。



哲学の道

開催日/９月１日(日)、８日(日)
場　所/レンタルスペースアイム
来場者数/1日90名、8日61名

銀閣寺を訪れる観光客をターゲットにPRする。
2日間とも大学生とやまなみアーティストがリーフレットの配布や、宣伝等積極的に参加。やまなみアーティストも率先して作品紹介をする等、日常とはまた違う表情を見せる等、たくさんの方とのつながりが生まれる。

安楽寺

開催日/９月１日(日)、２日(月)
場　所/安楽寺
来場者数/1日80名、8日120名

安楽寺内において、京都精華大屋台を出展。大阪人間科学大学の学生が来場者に作品説明とグッズ販売PRを行う。1日にはやまなみアーティストによるアートライブと、カフェスペースも設けられランチやドリンク等で多くの賑わいをみせた。

カフェ協力：菊しんコーヒー
京都府京都市東山区下弁天町61-11
菊しんアパート101号

桜谷町４７

開催日/８月２４日(土)～９月８日(日)
※８日のみアートライブ
モバイル屋台出展
場　所/　ギャラリー桜谷町４７
来場者数/２７５名

縁プロジェクトの期間中、やまなみ工房アーティストの作品を鑑賞できる場として開催する。
安楽寺や哲学の道に来られた観光客や縁プロジェクトを目的に来館される方等、幅広い層に知っていただく機会となる。
最終日には、アートライブも開催、アーティストが会場で作品制作を行い作品が生まれる過程や、彼らの日常の様子を紹介できる。

展覧会

縁プロジェクト２０１９活動報告展

- アートでつながる縁！やまなみ工房×こども芸術学科 -

開催日/１０月２８日(月)～１１月１日(金)
※１日最終日、トークイベント
場　所/京都造形芸術大学人間館１階
来場者数/２８５名

縁プロジェクト２０１９の最後を締めくくるイベント。
活動報告展と題し京都造形芸術大学学内において、制作されたモバイル屋台６台を展示しプロジェクトの様子等収めた映像等も紹介する。
最終日においては、トークイベントを開催、プロジェクトの目的や今回の取り組みにおいて学生らが感じた事学んだ事をワークショップ等交え報告した。

縁プロジェクトを振り返って

－　活動を終えて　－

まず、私は人生で初めてプロジェクトというものに関わりました。今回、縁プロジェクトという企画を通して、周りの人と関わりをたくさん持つことが出来て、障害者アートとは何か、伝えるとはどういうことなのかということを私自身も学ぶことができました。

私は、井村ももかさんという作家の方を担当させていただきました。ご本人と関わる時間が少ないまま「井村さんの作品をより良く見せるにはどうすればいいのか」というのが凄く難しかったです。ですが、屋台デザインを構想していくうちに「このデザインであれば喜んでくれるかもしれない」と相手の笑顔を浮かべられるようになり、より一層井村さんの作品の魅力を「皆に伝えたい。」という気持ちが高まりました。

今回の活動を通じて、今後も「まだ足を踏み入れた事がない世界」に触れ、そこで出会いも大切にしていきたいと感じるようになりました。

（京都造形芸術大学２回生/中田茉友子）

－　鎌江一美さんとの出会い　－

とても細やかな無数の粒で覆い尽くされた彼女の作品を初めて見たとき、私の中で衝撃が走った。それと共に、それほどまでに夢中にさせる「まさとさん」はどのような魅力を持った人なのかとても興味が湧いた。

初めてバディとして顔を合わせた時、彼女は動じることなく笑顔で私を歓迎してくれた。隣に座って作品を黙々と作る彼女に質問すると端的に答えてくれる。この様なやり取りを数回繰り返した段階では、寧ろサバサバとしている印象を受けた。しかし、ある話題をきっかけにその印象はガラリと変わるのだ。それは、あの「まさとさん」について聞いた瞬間だった。いつもやまなみ工房の乙女たちとガールズトークに勤しむという。そこにある姿はやはり、想像していた通りの可愛らしい恋をしている女性だった。照れながら嬉しそうに話してくださる彼女の姿に、私は胸を打たれた。

（京都造形芸術大学２回生/木村凜香）

－　活動のふりかえり　－

京都精華大学の方々が造られた屋台の組み立て方と固定の仕方は事前に確認していたのですが、実際どのように組み立ててレイアウトしたらいいのか、非常に苦労しました。販売メンバーで試行錯誤しながら組み立てたのですが、特に初日は販売する作品の置き場所によっては何が置いてあるのか見えにくいといった事がありました。作品ごとに良い位置を探し、中には低い位置と高い位置に置くことで、子供から大人まで見やすいようにしました。

販売を通して「障害者アート」と「一般的なアート」という区別をする必要はないと感じました。なので、障害の有無を問わず一人の作品を知って頂けるよう心がけました。

プロジェクトでは屋台販売だけでなく、やまなみ工房の作家さんとバディを組んで交流も深めてきました。僕のバディである井野くんは言葉を使ったコミュニケーションが苦手です。何を言っているのか分からない時があり、最初は相づちや頷きをして分からない中でも聞く姿勢を大切にしていましたが、今は分からない時に素直に「ごめん、分からないからもう一回言ってもらっていい？」と正直に言えるようになりました。すると井野くんは、動作や仕草、表情を使ったり、タブレットを見せて伝えてくれたりもしました。言葉だけに留めず、障害の有無に関わらない相手に合ったコミュニケーションをする事が大切だと思いました。

（大阪人間科学大学２回生/竹下央起）

－　縁プロジェクトを経験して　－

最初は作家の方と上手くやって行けるか、緊張や不安がありました。ところが、１日を共に過ごす中で、不安よりも一緒に屋台を引く事が楽しみになりました。

屋台を使用し、街中で宮下さんの事を紹介する取り組みでは、多くの人に作品と宮下さんの事を知ってもらいたいと努めました。片言の英語で外国からの旅行者に話しかけたり、やまなみ工房を利用する方とも色々なお話をお聞きし、人と人が繋がっていくことの大切さを強く感じました。

すべての活動を終え、障害のある方に対する見方が変わったことに私は気がつきました。元々、障害のある方に偏見等は持っていなかったですが、街中で見かけた時に、なぜこのような行動を取っているのだろうか、なぜ大きな声で叫んでいるのだろうと、その人の内面を考えるよう意識が変わっていました。

このプロジェクトをやってみて、凄く良い経験をさせていただいたと思っています。

（京都造形芸術大学２回生/土井菜々子）

－　バリバラ　－

出会った瞬間、誰もが大路裕也という人間に惹かれ心奪われるでしょう。彼の性格、人柄は、言葉では言い表せないほどの魅力があります。彼はよくエアギター、エアたばこ、エア野球をして人を楽しませてくれます。その行動の一つ一つも彼の表現のひとつなのでしょう。

そんな彼の表現の一つに、絵画がありました。彼は絵を描いている時、必ず周囲の様子を伺います。自分が注目されているかチェックしているのです。立ったり座ったり、頭を抱えて考えたり、彼は描いている自身の姿すらデザインし、自己表現の一つとします。

そんな彼だからこそ、自分の作品を観てもらうことに凄まじい執着をみせます。私は彼のそんな姿に憧れを抱きました。そして、彼とこのプロジェクトにたくさん関わる中で、自分自身「自信を持つこと」の大切さを学びました。そして、少しだけ自分に自信を持てるようになりました。

（京都造形芸術大学２回生/小濱いづみ）

－　アートをもっと気軽に　－

初めての屋台制作なので苦労することも多かった。試行錯誤しながらも、結果的には自分の色を出しつつ、大家さんの作品の世界観が伝えられるような屋台になったと感じた。

そしてイベントの日、暑い中私が作った屋台の前に立ちリーフレットを配る大家さんの姿を見て、やってよかったと強く感じ、嬉しさがこみ上げてきた。屋台を通して作品を見てくださった方の中には、普段アートと呼ばれるものに繋がりがない人が多かった。そんな人たちにも、気軽に見ていただき、そこから会話をすることができて、屋台の役割の大きさを感じた。

アートと聞くと、壮大なものをイメージしがちで、美術館等で楽しむもの考えがちである。しかし、もっと気軽に、アートに興味あるなしと関係なく、思わぬところで出会うというにはとても素敵で日常が豊かになると思う。屋台以外にも多くの人の目に入るようなプロモーションを今後もっと考えてみたいと思った。

（京都造形芸術大学２回生/諸井まり）

ある賞の受賞に際し、自らがその賞を受賞することについて、逆差別だと自らの気持ちを吐露した黒人アーティストの話を、イギリス滞在中に耳にしたことがある。もちろん私は彼の気持ちを代弁できるような立場にはない。しかし、身勝手なままにそれを読み取り考えてみると、賞を与える側の社会的な配慮（受賞者が特定の人種に偏ってはいけないというバイアス）が、受け取る側の彼自身にあまりにも透けて見え、心苦しく感じられたと考えることができるだろう。目の前で自らに賞を差し出す他者の視線が、自分よりもはるか遠くに焦点があった顔をしている（その人自らの保身のために）。

このような光景は、単に遠い国のお話しではなく、私たちの日常においてもさまざまな形で存在している。「こんなことを言ったら嫌われるかな」とか「こんなことを言ったら自分の考えが浅はかなことが相手に知れてしまうのではないだろうか」といった不安を、私たちはことあるごとに感じ、自らの意見やアイデアを発信することに歯止めをかけてしまう。そして、そのような行為が、目の前にいる他者を結果的に透明人間にしてしまう。それが差別であるかここでは厳密には触れないが、また、障がいがあるなしに関わらず、目の前の他者との関係を構築するためには、お互いに表現しやすい環境を心がけることが不可欠である。それは、自由に発信されたそれぞれの表現を受け入れるという環境の構成である。そしてそれが案外難しいことは、私たちは日々のなかで、身をもって感じている。

縁プロジェクトを通した学生の取り組みは、まさに、そのような関係を「表現」を通して、獲得する取り組みだったのではないだろうか。やまなみ工房のアーティストが表現した作品に対して、それらを単に受け入れることにとどまらず、自らが表現し直し（屋台をデザインし）、相手に届け直す。「自分らしい表現とはなんだろう」と「本当に喜んでくれるのだろうか」との間で葛藤をし、その後、学生は自らの表現を受け入れてもらう場に出会う。その時のそれぞれの学生の嬉しそうな表情を今でもはっきりと筆者は覚えている。

人は、困難を乗り越えるときに最も美しい、コミュニケーションの不自由さを明確にし、その不自由さを自らの表現行為を通して克服する。このような他者との間にフラットな関係が立ち上がる瞬間は、まさに「芸術（を通した福祉教育）」そのものであったといえるのではないだろうか。

京都造形芸術大学こども芸術学科教員/彦坂敏昭

感性や美意識や直感が求められる時代である。私たちは目の前の問題を分析し、解答を探し、実践するという科学的な問題解決方法では解決する事のできない問題に囲まれて生きている。感性や美意識を高く保ち続けることは、その人がそれまでの人生の中で、どれだけ感動したり、美しさに魅かれたり、驚いたりする経験を積んできたかにかかっている。つまり現代では、アートの力、アートに触れる機会が必要とされているのである。

アート×まち×はたらくという今回のプロジェクトでは、まさにこのアートが持つ力を再認識することになった。やまなみ工房を訪問した際には、大きな驚きと感動を得た。その日常生活の中にあるアート作品以外の何物でもない物体たちは、人を魅了するオーラに満ち溢れていた。

これらの作品を移動展示するための、移動ミュージアムは、作品を主人公とする「屋台」に過ぎない。その屋台をいかに合理的でかつ芸術的な要素を盛り込むことができることができるか。デザインを考え始める条件は、学生達には手が届かないレベルまで、あえて高く設定した。その過程では学生達は案を出し続け、模型制作や試作品をつくりつづけ、試行錯誤する中でアイデアは絞り込まれ、結果として高い完成度で生まれたのが今回の移動ミュージアム、「FELLOWS」である。FELLOWSには、今回グループで制作した学生達自身も含まれている。

自分の子どもに会いに行く心情で、実際のイベントを見学した。場所や環境に応じて展示形態が変化している風景、この新しい屋台の使い方が理解され、使いこまれている様子を見て、心から嬉しく思った。屋台が出動しない期間でも、やまなみ工房内での展示スペースとして活用いただきたいと願っている。学生達にとって大きな財産となったのは、制作に関わったことのみならず、やまなみ工房で活動される人たちに出会ったことであることを確信している。

今回制作した移動ミュージアムは、京都デザイン賞２０１９　家具部門で入賞したことを合わせて報告し、関係の皆様への謝辞としたい。

京都精華大学建築学科教授・建築家/葉山勉

「学生の本分は勉強である」と言われる。それに異論はないが、勉強とはなんだろうか。わたしは普段、授業や講演をやることが多いが、あれは、何を提供しているのだろうか。今回、この縁プロジェクトで悩んだり笑ったりぶちぎれたりしている学生さんたちを観察しながら、そんなことを考えていた。

やまなみ工房で、忘れられないシーンがある。それは、やまなみの人たちと初めて会った日で、学生さんたちはがちがちに緊張していた。それで、きっと普段教わっている通りに礼儀正しくしたのだと思う。やまなみの人が話しはじめると、学生さんはすごい熱意でメモをとりはじめた。顔をあげることはほとんどなかった。わたしは「ああ、勿体ない、顔を上げて話している人を観察した方が多くの情報が得られておもしろいのに」と思って見ていた。そうしたら、NHKのディレクターさんから声が飛んだ。「メモ取らなくていい！顔上げて！！」どういう意図で彼がそう言ったのかは知らない。でも、そこから、やまなみの人たちと学生さんの間の時間が動きはじめた。ノートから顔を上げた学生さんは、見学者としてではなく、何をしたらいいのかわからない、ただの人としてそこに存在した。無防備にすら見えた。本当の意味でプロジェクトが始まった瞬間だった。

学生さんたちにとって、やまなみの人たちは初めて出会った種類の人たちだっただろう。でも、今回のプロジェクトはそれだけではない。異分野かつ他大学の学生となにかをやることも、親と教員以外の大人と協働することも、街に出ることも、お客さんが来ることも、全部、貴重な経験だっただろう。学生さんたちはその体験を通して、障害者観もアート観も、つまり人間観も世界観も変わった。そして、その経験は遠くない将来、福祉系の人は福祉の分野で、美術系の人は美術の分野で、確実に活かされていくだろう。貴重な経験というのは、そういうものだ。そこから何かを考えざるを得ないし、そのことによって人生が変わる。でも、それはあの屋台の前を通りがかった街の人も同じだろう。

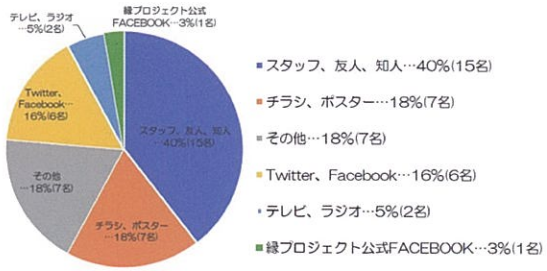
10年くらい先に、今回のプロジェクトに関わった学生さんたちにもう一度会って、聞いてみたい。「あの夏は、あなたにとってどんな夏だったの？」と。きっと今とは違う答えが返ってくるはずで、つまり、今回のプロジェクトは、そのくらい桁違いの経験を皆に刻んだのだ。

大阪市立阿武山学園（児童自立支援施設）性教育担当専門講師
関西学院大学・京都精華大学・大阪人間科学大学非常勤講師
思春期保健相談士/　あかたちかこ

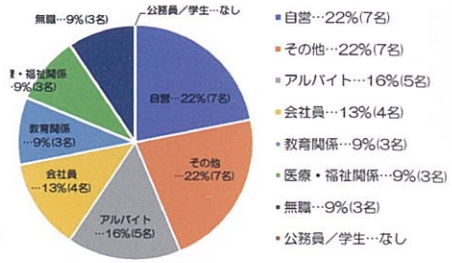
展覧会来場者アンケート

回答数32件　※複数回答あり

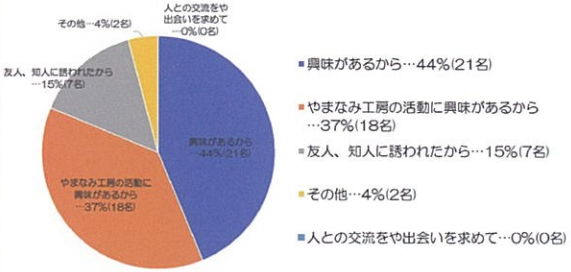
■「縁プロジェクト」及び今回の企画を何でお知りになりましたか？(48回答)



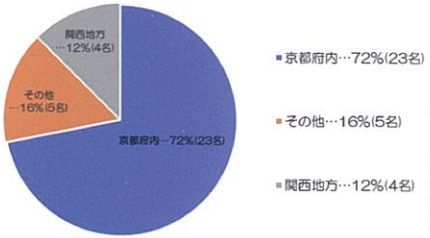
■職業をお聞かせください



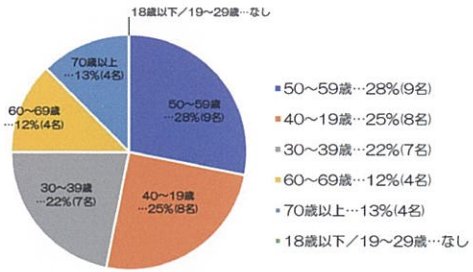
■本日の企画にご来場された理由は何ですか？(48回答)



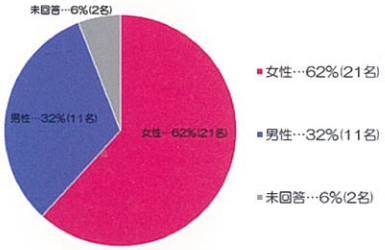
■どちらからお越しいただきましたか



■年齢をお聞かせください



■性別



■「縁プロジェクト」へのご意見やご感想、または今後期待することがあればお書きください　(25回答)

・素敵な作品でまた観に来たいです
・もっともっといっぱい作品を見たいです
・とても面白いと思いました
・前回展示を見て感動したので、映画も見てみたいです
・いろんな人、普段つながることがない人が作品や活動を通して大きくつながっていくことは、とても素敵だと思いました
・よく知らないのですが、とてもおもしろかったです
・興味深く、おもしろかったです
・作り手だけでは世の中に発信できないので、どんどんつながって欲しいと思います
・桜谷町47に来させてもらいました
すごくかっこよいと思う絵などに会わせてくれるチャンスをくれて、ありがとうございます
・すばらしい作品ばかりでした
・すてきなギャラリーでこうして展示されているのがすごく良い活動だと思います
純粋だから持っている何かを感じれるような気がします。もっと多くの作品を見てみたいと思いました。
チラシにギャラリーの地図があれば良かったと思いました
・活動を続けられるように！
・どの作品もエネルギーに満ち溢れて素敵でした。陶土の作品に圧倒されました
・アートの輪が広がればいいと思います
・なかなか素敵なプロジェクトだと思います。陰ながら応援させて頂きます
・とても素晴らしい企画だと思いました。
今後も子供から大人までのアート作品境界をこえた世界を感じる場をお願いします
・また伺います
・やまなみ工房をバリバラで知り、工房での展覧会に行きました。
私は京都在住なので今後も京都市内で展覧会をして欲しいです
・作品の素晴らしさをより多くの人々に知って頂きたいですね！
・以前より、やまなみの活動には、ドキドキしています
・とても素晴らしい。もっと知られるようになればと思います
・もっと広く周知して欲しいです
・同時期に雰囲気の異なる場で活動を見ることができて良かったです
・色々な場所でやまなみの利用者さんたちの作品にふれること

■「縁プロジェクト」で得た情報や経験について、今後ご自身の生活や活動に活かせることはありますか？　(14件)

・活かす場に出会えば活かしたい
・活動がすでに多くの人々の努力により知られつつあると思います。非常に勇気づけられます
・やりたいことをやるのはワガママではないと思いました
・作品を見ると元気をもらえます。生きる意味を考えます
・世の「お母さんたち」に伝えたいことが、自分の活動を通じて出てきた気がします
・今のところ思いつきません
・細かさや美しさやユーモアに元気をもらえました
・表現方法が違えど、とてもエネルギッシュな作品を観て、私自身仕事に活かしていこうと思いました。
エネルギッシュな建築を作るぞ！！
・何かに夢中になる、そんな気持ちをより起こしてくれたように思います
・創作意欲が湧きました！
・あると思います
・障がいがある人、ない人というだけでなく、世代や人種など様々な枠に重ねて考えられると思いました
・色、物の見え方
・もっと根本から根元から、もっと無心で無で、生きていきたいと思いました

プログラム②
町家カフェ アートギャラリー/オリジナルグッズ制作

町家カフェ アート ギャラリー 9/3(火)～/8日(日)

京都市内の町家カフェ店内において、縁プロジェクト期間に合わせやまなみ工房の作品を展示する。
美術館やギャラリーで作品を鑑賞するだけでなく、作品が自然に地域や環境に溶け込み、誰もが気軽にアートを楽しめ、人と人、人と地域を「アート」でつなぐことを目的に開催した。

展示スペース①

アイタルガボン

京都市上京区中町通丸太町上ル俵屋町435

メインビジュアルや今回の縁プロジェクトのオリジナルグッズにも使用された田村拓也の作品をメインに展示する。
カラフルな色彩の作品が通常のお店とは違った雰囲気をつくる。

□出展作家／　田村拓也
山際正己
大原菜穂子

□来場者数／　約190名

展示スペース②

ことばのはおと

京都市上京区天神北町12－1

古民家を改装した店内、鉄道模型等、店主の趣味がたくさん詰まった中に自然に溶け込むような作品をセレクトする。
電車に関連した作品や、土人形を本棚やテーブル、庭等に散りばめお店全体を使って展示を行う。

□出展作家／　KATSU
木村圭吾
山際正己
大原菜穂子

□来場者数／　約100名

展示スペース③

スウレッド カフェ

京都市上京区上立売道小川東入る西大路町58

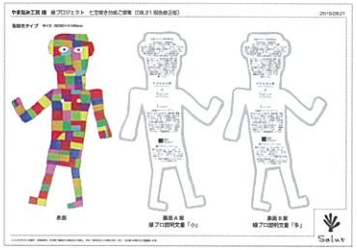
白をベースにした明るい店内にモノクロや色鮮やかな物等、作風の違うバリエーション豊かな作品をそれぞれ展示する。店内の雰囲気に溶け込むような作品からじっくりと鑑賞できるような細かく描き込まれた作品等、いろいろな楽しみ方ができる展示をイメージする。

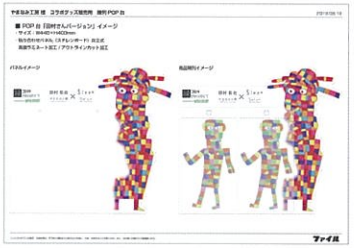
□出展作家／　岩瀬俊一
岡元俊雄
川邊紘子
神山美智子
城谷明子
三井啓吾
山際正己

□来場者数／　108名

オリジナルグッズ制作

京都にあるNPO法人Salut(サリュ)とやまなみ工房がコラボレーションして、縁プロジェクトのオリジナルグッズ開発を行う。
やまなみアーティストの作品をモチーフにSalutの七宝焼きでアクセサリーを制作。パッケージデザインやパネル制作には、町家カフェでコーディネートディレクションとして参加いただいたファイル・和田氏に協力いただく。
プロジェクト期間中、モバイル屋台や町家カフェにて販売、製品化し販売する事で「働く」ことの目的に繋げ、活動の理解促進を目指す。





写真／　山口 優

今回、ご縁があって「縁プロジェクト」に参加した。そして、町屋カフェとグッズ開発を担当させていただいた。
まず、やまなみ工房を知るため、施設に赴いた。主な目的が打合せだったので、利用者さんらが帰宅した時間帯を見計らってお邪魔したのだが、それがよかった。利用者さんがいないのに、それでもさっきまであった心地よい喧噪を全身で感じることができた。それは、生命的というのか、魂的なものというのか、温かな余韻が感じられた。作品や具体的な何かに触れたわけでもない段階から「ここが好きだ！」と直感的にわかった。
こういう感覚をひとりで味わうにはもったいなく、デザイナーの和田大作さんや当事業所の利用者である山口優さんとともにその場でしか味わえない感覚を共有できて、本当にラッキーだと思った。
そして、自身が運営している事業所以外のことで、ただただ必死に縁プロジェクトを成功させたいと願い、後先も考えず夢中になれた時間やそんなわたしに出会えたことがうれしく、さらにわたしを夢中にさせた。また、そこで出会えた人々との関係がまるで昔からの友人のような安心できる存在になったこと等が、わたしのとっての縁プロジェクトだった。
やまなみ工房は、ひとの根本や本来的に備え持ったエネルギーを、心地よい速度でひらいてくれる場。そして、加速主義の現代社会において非常に稀有な、人々の往来がもたらす活気によって生成された自然と自由を感ずることができる場であるといえる。
このプロジェクトに参加出来て本当によかったと感謝している。

NPO法人Salut　吉川陽子

縁プロジェクトではグッズ販売用（台紙・POP）のデザイン製作や町屋カフェ・安楽寺イベントカフェ等のコーディネート&ディレクションにて参加させていただきました。
やまなみ工房へお邪魔した際、様々な利用者さんの制作される作品のパワーは未だに忘れられぬ衝撃的なモノでした。
カフェのオーナー様にお願いする際にも、冷めやらぬ作品の思いを伝え、それぞれに「縁」を感じていただき実現に至りました。
今回以上に主催者と参加店舗が密に寄り添うことにより主催者×参加店舗×ゲスト（参加者）の繋がりが増し、さらなる展開も期待できるのではないでしょうか。
色々考えさせられる点はございましたが、今回の「アート×まち×はたらく」縁プロジェクトのテーマに基づいた活動ができたのではないかと感じております。

ファイル　和田大作

普段は私自身、B型就労支援施設の利用者でもある。
そうした、やまなみ工房の利用者さんにも近い立場でありながら、今回、レンズを通して、縁プロジェクトの記録撮影に一部関わらせていただいた。

そこで感じたこととは、作品とアーティストさんがおられる空間での、のびのびとした居心地という感覚であり、その場の中でただシャッターを押すことという能動的なよろこびを感じられたことである。

それは、やまなみ工房での日々の生活の中にあるのだろう、
大事に積み重ねられてきた時間に触れさせていただいたような、貴重な体験であった。

NPO法人Salut　山口 優

アンケート

ュニケーション」

この変化について

舗

展示は、初めてであったため大変

庭やトイレも含めて店全体に作品

ていた

いの多さでお店が明るくなった

変マッチしていた

る作品

にある

作品に対する熱量を持っていた

来場されフォローがしっかりしていた

る興味・考え・印象」

障害者アートに対する変化

「明るさ」「自由」「解放感」

白いと感じた

カルチャー等との相性がよいと

は作れるものではないと感じた

たいものを作るという意志が

や完成度が高い

説明する必要がないと感じた

背景を聞くとやまなみ工房に行

心が強くなった

っていることをやまなみ工房の

2）作品を通してのスタッフとお客様の間のコミュニケーションについて

少しあった　全店舗

（内容）

- やまなみ工房の展示があると知った上でのお客様は、大変関心が高かった
- 知っている知識をお客様に伝えると関心を持って聞いてもらえた

（コミュニケーションが難しかった理由）

- 作品展示がお店に馴染んでいたため
- 学生等の若い世代は、絶えずスマホを触っているので作品展示に気づいていないため

（お店について）

- 敢えて障害者アートと説明せずお客様が作品全体に囲まれている感じがいいのではないか
- お店がバリアフリーでないためかなり心配であった

（提案事項）

- 事前にやまなみ工房の見学ができると作品紹介ができると思った
- 町家は段差ばかりなので、身体障害者等への配慮が必要であるため主催者側と店舗が事前に十分に話をした方がいいのではないか
- 盲導犬と一緒に来場可能のアナウンスを事前にした方がよいのではないか
- 情報発信の期間を充分にとる
- 開催期間はもっと長い方がよい
- 各店舗を回ったことがわかるようにスタンプラリーを実施し、全店舗回ると公式ステッカーがもらえる等の工夫があると集客につながる
- 京都のカフェ文化は独特であり横のつながりがあるため、数珠つなぎでカフェからカフェを紹介してもらうのが

プログラム③
SNS／メディア関係

ＳＮＳ関連

●ＳＮＳ運用期間
2019年8月19日～11月1日

●運用SNS
ツイッター／インスタグラム／フェイスブック

●イベント開催期間
2019年8月24日(日)～9月8日(日)　計16日間
※アフターイベントを10月28日(月)～11月1日(金)実施

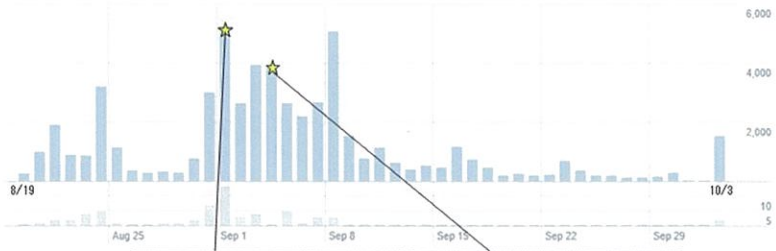
●イベント関連TV放映
NHK 総合　8月23日(金)放送「ぐるっと関西おひるまえ」
※ 関西ローカル

NHK Eテレ　10月3日(木)放送「バリバラ」
※全国放送
※再放送　10月6日(土曜深夜)放送

Twitter（ツイッター）インプレッション推移
（期間：8/19～10/3の48日間）

…48日間で53,832件の
インプレッションを獲得

縁プロジェクト開始は8月24日（日）
一時的にインプレッションが3,000まで上がったものの、イベントが8月31日まで空いたことで300を切るまで低下。
以降は9月8日のイベント閉幕まで2,000以上のインプレッションをキープ。
特にトップインプレッションの9月1日は京都造形大のアカウントがRTした影響で、多くの方に情報を届ける事ができた。
また10月3日にバリバラ放送告知ツイートも、同様にRTの影響で短期間ながら1,000以上のインプレッションを得られた。



9/1(日)トップインプレッション
インプレッション数:5,204
ツイート数:13

9/4(水)インプレッション
インプレッション数:3,839
ツイート数:0

縁プロジェクト @enproject2019
#白沙村荘 近くのレンタルスペースアイムで
#京都造形芸術大学 の屋台が出没中！

#やまなみ工房 の作品が展示されてます。
それぞれ作家をイメージして屋台が作られてます。

こちらも是非ご覧ください！
pic.twitter.com/NwFCDRHnLL

インプレッション	3,200
エンゲージメント総数	223
メディアのエンゲージメント	196
いいね	9
プロフィールのクリック数	8
リツイート	5
詳細のクリック数	4
ハッシュタグのクリック数	1

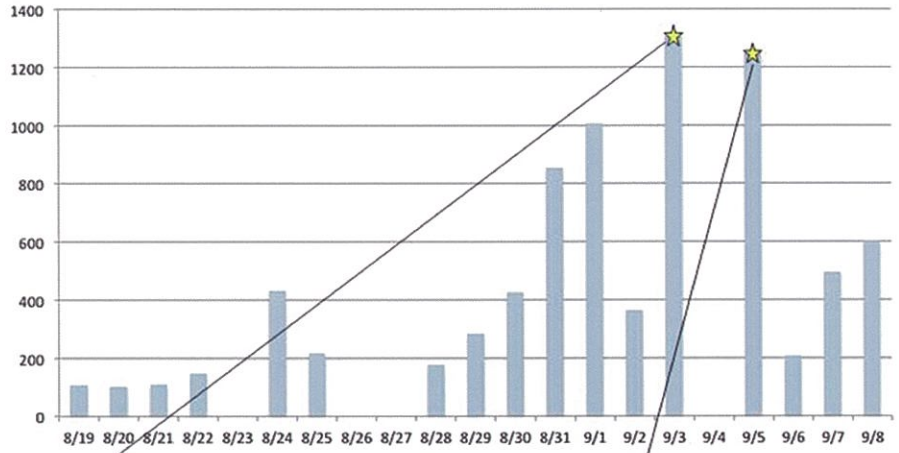
↑９月１日(日)は銀閣寺近くのレンタルスペースアイム・哲学の道の安楽寺、2か所でイベントを開催。この日の呟きが全体の中でも2番目に多いインプレッション数を獲得する。
エンゲージメントも７％と非常に高い。

Instagram（インスタグラム）インプレッション推移
（期間：8/19～9/8の21日間）

…21日間で8,047件の
インプレッションを獲得

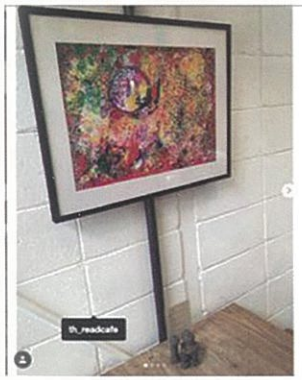
★カフェギャラリーweekの投稿がインプレッションもエンゲージメント率も高かった
→カフェのファンが位置情報やハッシュタグから投稿にたどり着いた

★ICOM関連の投稿をした9/5も
2番目にインプレッションが高い
→・動画コンテンツだった
・ハッシュタグから投稿にたどり着いた割合が多いことからイベントを見た方が#ICOMから投稿を見たと推測される



9/3(火)トップインプレッション
インプレッション数:1,306(3投稿全てカフェについて)
エンゲージメント率:7.1％

9/5(木)インプレッション2位
ICOMに合わせたイベント開催。

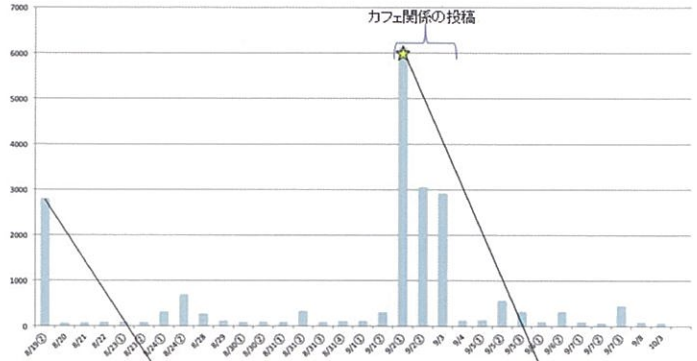


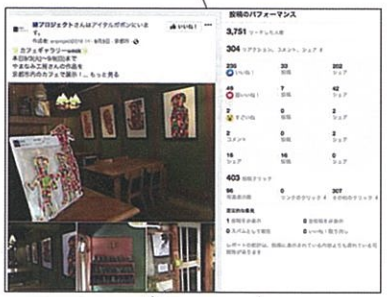
Facebook（フェイスブック）投稿別インプレッション
（期間：8/19～10/3の48日間）

…48日間で20,129件の
インプレッションを獲得

★FacebookはInstagram投稿と連携させたため、独自の投稿内容はほぼない
→Instagramと結果は似ており、カフェギャラリーの投稿がトップインプレッション
→リーチも1000以上を超えていた

★InstagramでインプレッションがHCOM関連の投稿は伸びず
→しかしエンゲージメント率は11%と高かった





↑Twitter、Instagram全てで投稿した中で
Facebookでの投稿が一番インプレッションが伸びた
情報の告知力が高かったのがFacebookだと推測される

SNS関連、総括

■大学アカウントがRTしたり、すでにファンがついているカフェ、フォロワーの多いアカウントと連携が図れた投稿についてはインプレッション数やリーチ数を多く獲得でき、たくさんの方にイベントを周知する事ができた。

■来場者アンケートとSNS解析の結果を照らしあわせると、40代以上の来場者が過半数を占めていたため、やはりFacebook投稿のインプレッション数が高かった。
今後もFacebookでの投稿に引き続き力を入れていく一方、若者へ訴求できる投稿を増やしていくことが課題。
若者が一番利用しているとされるInstagramのインプレッション数が低かったため、どのような投稿が見られるのか分析する必要がある。

■今後、SNS運用する際はより綿密に主催団体や協力団体とSNS投稿の連携を図るべき。
特に予算が限られている状況で、大事なのはイベント関係者のSNSを使った宣伝への意識を高めることだと感じた。

イベント関連TV放映

●NHK 総合　8月23日(金)放送「ぐるっと関西おひるまえ」
※ 関西ローカル

●NHK Eテレ　10月3日(木)放送「バリバラ」
※全国放送　　※再放送　10月6日(土曜深夜)放送

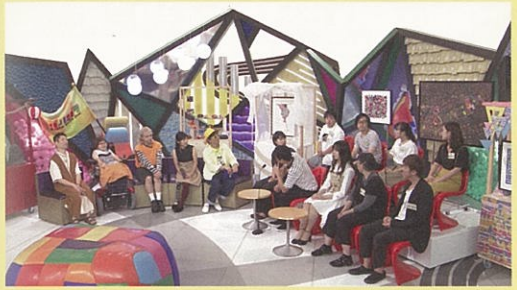
NHK Eテレ　バリバラ
「アートの力で『縁』をつなごう」

＜りゅうちぇる氏、番組内コメント＞

◆「縁プロジェクト」について
本当に楽しかったですよ。やっぱり凄くその場に行ったら活気があるのは、もちろんなんだけどアートを真ん中、軸にして人と関われる。やっぱりみんなとおしゃべりしながらアートを楽しんで観れるような環境が自然に出来るんですよ。
そこが凄く「屋台っていいじゃん！！」みたいな。良いこと尽くしでした。

◆竹下くんと井野くんの「コミュニケーションの壁」VTRを見て
2人の会話を見てるとやっぱり壁がある。
でも僕、たけちゃんの気持ちも分かるんですよ。やっぱりどうやって向き合ったらいいんだろうとか、こういう言葉は言っちゃダメなんじゃないかとか。
なんかちょっと壁を作ってしまう、自分が、みたいな。

◆モバイル屋台について
それぞれの個性がアートに出ていて。
それを大学生がより作品（屋台）で、分かったこの人の個性、特徴、作品の素晴らしさを本当わかりやすく伝えていて。この連携プレイも素敵だと思った。



参加した大学生から「（障害者に関わるのは）初めて」という声があったが、これを聞いて教育関係者はどう考えるのか？ そこに気付かないといけないと思う。インクルーシブ教育と言いながら、大学生になるまで（障害者と）つながらなかった、というのはこれまでの教育の結果。今回、この「縁プロジェクト」で、たまたまアートで、つながっただけで、今回のつながりが未来にどう広がっていくのか？ 彼らが社会人になってアートだけでなく、違う接点でどうつながって触れ合っていくのか？ これから（障害者に）出会ったときに、今回のように掘り下げて確認し合えるようになるのか？ そこを考えることが大事だと思う。

玉木幸則

■番組を見た感想
（ツイッターコメントより）

・この企画、学生にとっても新しい発見が得られいい経験となるでしょう。

・玉木さんのコメントいいなぁ。”インクルーシブ教育と言いながら、大学生になるまで（障害者と）つながらなかったというのはこれまでの教育の結果。

・玉木さんが仰有っている事は本当に感じる。アートは障害者とのコミュニケーションをつなげている。

・一回きりの縁ではもったいない。これから先縁をどんどん広げていきましょう。

・帰宅してバリバラ見てる。コミュニケーションは言語だけではない。アートの役割はまだ大きい。

・「コミュニケーションの壁」があるんだということに向き合う放送に正直驚く。

やまなみ工房がアート活動をはじめたのは今から30年ほど前の事、当時は内職等、下請け作業といった生産活動が主だった中、利用者一人ひとりが個性豊かに自分らしく生きられるよう、それぞれの思いやペースに寄り添い様々な表現活動に取り組むようになりました。

その頃は、彼らが生み出す作品も見てもらう機会も乏しく、社会の目に触れても「障害のある人が頑張ってつくったもの」「障害があってもこんなものがつくれる」といった偏った見方をされるのが一般的でした。

「障害」という視点で捉えるのでなく、個性豊かで素晴らしい人格者の彼らに目を向けてほしい、知ってほしいという思いで、これまで活動を続けてきました。

近年においては、彼らの作品が社会の中で評価され美術的価値が生まれ、美術館やアートフェア等、国内外問わず様々な場所で紹介されたり、デザイン使用として企業等から多く依頼を受ける等、少しずつではあるが社会的にも認知される機会も増えてきました。

しかしながら、それはあくまでも一部の美術愛好家や障害者福祉関係の方がほとんどで、ひとつ社会に出ると、多くの人は知らない、関係がないといった無関心層がほとんどであると言えます。

この縁プロジェクトは、これからの日常「障害」や「アート」に関心のない人や地域、また海外から来られる美術関係者や外国人観光客らに、参加した大学生らが屋台というツールで街を回遊し、彼らの作品を通じて「縁」をつなぐというこれまでにない試みでした。

関わった大学生達ははじめ、作品を知る目的で施設に訪れ見学と話を聞きイメージを膨らませた後にそれぞれの屋台を作り上げましたが、展示コンセプトや紹介リーフレットには、ただ作品をを紹介するだけではない「その人らしさ」が全面的に表れたものとなり、アートを通じて大学生と彼らとの「縁」が生まれ、「障害」としてではなく、人と人がつながった事を実感しました。。

このプロジェクトを通じ、初めて彼らの作品に触れた人、彼らの事を伝えたいと関わった大学生の声を聞いた方の中には、必ず何か感じるものがあったものと確信しています。

彼らの表現や存在が、特別なものでなく当たり前に認知されることは共生社会の実現に向け、今回の縁プロジェクトがその一歩となるよう、縁がつながった人たちがこれからも考え実行していく事を切に願います。

最後に多大なるご支援をいただきました日本財団様と、NHKプラネット近畿様、ならびに多くの関係者の皆様へ厚く御礼申し上げます。

やまなみ工房　早川弘志

□主　催/　社会福祉法人やまなみ会　やまなみ工房

□助　成/　日本財団

□協　力/　NHKプラネット近畿

□後　援/　京都府社会福祉協議会
京都市社会福祉協議会
朝日新聞京都総局
毎日新聞京都総局
NHK京都放送局

□学校関係/　京都造形芸術大学、京都精華大学、大阪人間科学大学

□グッズ制作、記録/　NPO法人Salut

□町家カフェ、グッズ等、コーディネート&ディレクション／　ファイル

□会　場／　安楽寺
ギャラリー桜谷町47
レンタルスペース アイム

□町家カフェ／　アイタルガボン
ことばのはおと
スウレッド・カフェ

□参加イベント／　京都 食とアートのマーケットin 東本願寺
京都マムフェス

□関連企画／

＜写真展＞「いのちといのち-やまなみ工房のいとなみ」川内倫子写真展
＊期間/ 8月16日(金)～8月26日(月)　11:00～21:00
＊会場/ ホテルアンテルーム京都　GALLERY9.5
京都市南区東九条明田町7番
TEL:075-681-5656
＊入館料/ 無料

＜映画上映＞　やまなみ工房ドキュメンタリー映画
「地蔵とリビドー」上映会＆舞台挨拶
＊期間/8月24日(土)～8月30日(金)
＊会場/京都シネマ
京都市下京区水銀屋町620 COCON KARASUMA 3F
TEL:075-353-4723
＊入館料/ 有料

＜洋服展示会＞「DISTORTION3／20SS展示会」
＊期間/8月24日(土)、25日(日)　11:00～19:00
＊会場/しまだいギャラリー
京都市中京区仲保利町191
TEL:075-221-5007

□助成／　日本財団

□編集・制作・発行／
社会福祉法人やまなみ会
やまなみ工房

〒520-3321
滋賀県甲賀市甲南町葛木872
Tel：0748-86-0334　Fax：0748-86-8911
http://a-yamanami.jp
mail: atelier@lagoon.ocn.ne.jp